市長賞

六月の花霊（はなだま）

鈴木　泉

「さっちゃんとわたしは、小学校からの友人です。…大親友です」
わたしのおばあちゃん（紀子（のりこ））の幼なじみであるさっちゃん（幸子（さちこ）さん）が、急な病気で亡くなった。
梅雨入り近くの雨の日だった。
とっても仲良しで、よくふたりでおしゃべりを楽しんでいた。わたしも、明るく楽しいさっちゃんのことが大好きだ。今日は土曜日で小学校がお休みなので、わたしもお葬式に参列させてもらっている。
色とりどりの花で飾られた大きな祭壇。まっすぐに立ち上るお線香の煙と白檀の香り。うつむく喪服の人々。
おじいちゃんのお葬式のことを、ぼんやりと思い出していた。あのとき、わたしはまだ五歳だった。
おばあちゃんのお別れの言葉は続く。
「さっちゃんは優しい人で…」
会場に何人ものすすり泣きが響いた。わたしも涙がこぼれた。
祭壇に飾られたさっちゃんの遺影は笑っていた。数日前と同じ笑顔だった。急なお別れが信じられない。

おばあちゃんは何度も声を詰まらせながら、お別れの言葉を読み終えた。
「さっちゃん、ありがとう。本当にありがとうね…」
最後にそう言って、おばあちゃんは深々とお辞儀をした。
「いい弔辞だったね」
「うんうん…」
そんな会話が、あちらこちらで聞こえた。
おばあちゃんが席に戻ると、隣の席のおばあさんに、
「のりちゃん（紀子）のお孫さん？　何年生？」
と、声をかけられた。
「うん。小学五年生だよ」
おばあちゃんは答えた。わたしは、
「ユキノです。さっちゃんの友だちです」
と、言った。
「あら、そう。さっちゃんには、こんなかわいいお友だちがいたのね」
再び始まった読経と太鼓、印金などの音が、わたしにはまるで伝統芸能のように感じられた。

お葬式を終え、参列者は遺族に声をかけながら会場を出て行く。
「お花をどうぞ」
葬儀場の係の人が、参列者に白い紙に包まれた花束を渡していた。
「おじいちゃんの仏壇にお供えするように、いただいていこうかね」
おばあちゃんは花束を受け取った。

「ありがとうね。今日はお世話になったね」
おばあちゃんは係の人たちに頭を下げ、歩き出そうとして、ふと足を止めてふりむいた。
「おばあちゃん、どうしたの？」
「…あ、ああ。もう一束いただいていいかい？」
「たくさんありますので、どうぞお持ち帰りください」
係の人が、おばあちゃんにもう一束差し出した。
「わたしが持つね」
わたしは花束を受け取った。
自動ドアを抜けて外に出ると、風がなく小雨が降っていた。次々と傘の花が開いて、それぞれの帰路へと流れて行った。わたしたちは、右手で傘を差し左手で大きな花束を抱え、並んで歩いた。
少し歩くと橋がある。おばあちゃんは、橋の真ん中あたりで止まり、上流を見た。
「三人で、お弁当を食べたっけね」
土手には桜並木があり、春には多くの人たちが訪れる。満開の桜と菜の花。さっちゃんとお花見をしたのは、ついこの間のことだ。
今は、背高のタチアオイが姿勢よく並んでいる。下流の土手は、ツツジが終わってアジサイが咲いている。
この川は、ここからそう遠くないところで海に流れ込んでいる。わたしたちにはわからないけれど、よそから来た人は、このあたりで、もう潮のにおいを感じるらしい。

わたしは、シラス漁が盛んな港のある村で、両親とおばあちゃんと暮らしている。
「お帰りなさい。あら、たくさんお花をいただいたのね」
家に戻ると、おかあさんが玄関まで迎えに来た。

おかあさんは、夕べのお通夜でお悔やみをして、今日は村の人と交代でさっちゃんの家の留守番をしていた。
「いいお葬式だったよ」
「あのね、おばあちゃんのお別れの言葉、とても良かったよ」
脱いだ靴をそろえながら、わたしは言った。
「そう、さっちゃんもご遺族も喜んだでしょう。…さあ、お茶をいれましょうね」
「ああ、ありがとうね。花びんは納戸にあったっけか」
「ええ。仏壇の花びんには入らないわね。大きい花びんひとつでいいかしら」
おばあちゃんは、いただいた花を大きめの花びんに飾り、仏壇の前に置いた。
「このお花はね、今日の祭壇に飾ってあったお花だよ。さっちゃんのご遺族が、参列者に感謝の気持ちをこめて配ってくれたんだよ」
おばあちゃんは、花の挿し位置を直しながら言った。
白い菊、黄色い菊、薄紫と白のスプレー菊、黄と白と薄桃の大きな百合、ピンクのカーネーション、オンシジューム、デンファレ、かすみ草…祭壇はお花でいっぱいだった。
「さっちゃんが持っていた幸せを分けてもらうって意味もあるんだよ」
「さっちゃんが持っていた幸せって？」
「なんだろうね。さっちゃん、どんなことを幸せだと思っていたんだろうね」

翌日の日曜日も、朝から雨が降っていた。わたしは、花びんの水を替えて仏間に持って行った。
「おばあちゃん、お水を替えたよ」
「ああ、ありがとうね」
おばあちゃんは、花の挿し位置を直しながら、何か考えているようだった。

「…このカーネーションはもうダメかな。暑くなってきたからね。かわいそうだけど、抜かせてもらおうか」
花びらが茶色くなってしまっていた。
おばあちゃんはカーネーションを抜こうとして、手を止めた。
「どうしたの？」
おばあちゃんは目をつぶって、
「…はなだまさん、どうかお願いいたします」
と言い、するりとカーネーションを抜いた。
すると、どこからか［まじらしてー］と甲高い声がした。
わたしは「何？」と部屋の中をきょろきょろと見まわした。
おばあちゃんも天井を見ていたが、ゆっくりと今抜いたカーネーションに目を落とすと、
「…そうだっきねー。あたしが転校してきて、初めて覚えた方言が『まじらして』だった」
と、しみじみと言った。
「え？　今、おばあちゃんが言ったの？」
おばあちゃんはそれには答えず、わたしに向かって、
「あたしはね、小学校三年生の時にこの村に引っ越してきたんだよ。転校なんて初めてだったし、なかなかなじめなくてねえ。みんなが遊ぶのを遠くから見ていたの。その遊びの輪に入れてもらうのに『まじらしてー』って声をかけるのが、ここいらの子どもたちの決まりごとだったんだけど」
と、言った。
「入れてってこと？　…今、そんなこと言わないよ」
「そうだね、村の外から来た人たちが増えたからね」
おばあちゃんは、ふふっと笑った。

「あたしも『まじらしてー』って、なんじゃそりゃって思ったもんだよ。ひと月たっても言えなかったねえ…」
「おばあちゃん、辛かったね…」
「うん。それでも、あたしが勇気を出して、初めて『まじらしてー』って言えたのが『ゴム飛び』で、さっちゃんが『早く、早くおいでよ』ってニコニコして迎えに来てくれたんだよ。あたしの手を引いて、『さあさあ、ここにならんで』って。うれしかったなあ…」
「さっちゃんは、おばあちゃんが『まじらして』って言うのを待っていたのね」
「そうだね。…あのときはわからなかったけれど」
それをきっかけに、おばあちゃんはみんなと仲良くなることができた。さっちゃんとは、それからずっと友だちだ。
「おばあちゃん…あのね」
「ユキノ、今日は梅雨入りしそうだね」
おばあちゃんは、窓際に立って、昨日と同じように静かに降る雨をながめた。
聞きたかったけれど、今日は聞いてはいけないように感じた。
それにしても、いったいどこから声がしたのだろう。

翌日、わたしは学校からの帰りを急いだ。水たまりを気にせず、ばしゃばしゃと音を立てながら走った。今日の雨は大粒だ。
「ただいま！」
ぽんぽんと靴を脱ぎ、ランドセルを下ろさずに仏間に行った。
「おかえり」
リビングから、おばあちゃんの声がした。おかあさんは、まだ仕事から戻っていない。

わたしは花びんの水を替えた。朝、おばあちゃんが替えたのを知っていたけれど、暑くなってきたから、お花のためにと言って。

「なんだい、ユキノや。服もランドセルもびしょびしょ…着替えてきなさいよ。風邪ひいちゃうよ」

わたしは、しぶしぶ、おばあちゃんの言うとおりにランドセルを部屋に下ろして、服も着替えた。

「おばあちゃん、どう？　抜かなきゃいけないお花がある？」

わたしは、あの声の正体を探るべく、おばあちゃんに聞いた。

「そうだね。…この百合は、花びらが落ちてしまっているね」

わたしが水を替えたときに、弱っていた花びらがひらひらと落ちてしまったのだ。

おばあちゃんが、また「はなだまさん、どうかお願いいたします」と言って、黄色い百合を抜くと…どこからか［とびっくら！］と甲高い声が聞こえた。

わたしは、また部屋の中をきょろきょろと見まわした。

おばあちゃんは、今抜いた百合に話しかけた。

「びっくりしたよ。『かけっこ』のことだったとはねえ」

おばあちゃんは、うふふっと笑った。

「さっちゃんは、『とびっくら』が速かったっけよ。『とぶ』って言うから空へ飛んでっちゃうかと思ったよ」

「わたしに『ユキノちゃんは運動会でとびっくらに出るだか』って。よく『飛んでく』って言っていたね」

そう言えば、わたしも思い出したことがあった。

×　×　×

「あたしは、地元生まれの地元育ち。ユキノちゃんと同じでおばあちゃん子でね、おばあちゃんの話し言葉がすっかり身についたのさ。ここいらでは、『浜言葉（はまことば）』って言っているよ」

と、さっちゃんは言った。

「そうなんだ」
わたしは、村の方言を「浜言葉」と呼ぶことを初めて知った。
「さあて。のりちゃん、そろそろ帰るね。今度、何日？」
「明日、由比の茂ちゃんが桜エビを持って来てくれるから。今度、あたしがさっちゃん家に届けに行くよ」
茂ちゃんは、おばあちゃんの従弟で由比に住んでいる。
「生かい？　釜揚げかい？」
「生だよ。あははは…楽しみだね。冷酒を用意しといてね」
ふたりは三日と空けずに会っているのに、別れるときは、どちらからともなく次に会う日を確認しあっていた。

×　×　×

おばあちゃんは、うんうんとうなずいた。
「さっちゃんは一人暮らしで寂しがり屋だったから」
さっちゃんは夫を亡くし、子どもたちとも離れて暮らしていた。
「でも、あたしもさっちゃんに会えないと寂しかったんだよ」

その次の日も、わたしは学校から走って帰ってきた。昼過ぎに雨は止んだけれど、空には黒い雨雲が西から東へ動いていた。
水たまりを踏まないように注意して、部屋にランドセルを置いて、すぐに仏間へ行き、花の水を替えた。
「おばあちゃん、どう？　抜かなきゃいけないお花がある？」
また、雨の音が聞こえてきた。
「そうだねえ…かわいそうだけど、この小菊は抜かせてもらおうか」

おばあちゃんが、「はなだまさん、どうかお願いいたします」と言って薄紫色の小菊を抜くと、また、「行かず―！」と甲高い声が聞こえた。
おばあちゃんは、少し考えた。
「そうだ…今週末は八坂神社の祇園祭りだったね」
六月は、毎週末に村のどこかでお祭りがあった。
「そうそう、行くのか行かないのか。中学一年生の時にもめたっけ」
と、何か思い出したようだった。

× × ×

祇園祭りの日の夕方。幸子が紀子を迎えに来た。
「のりちゃん、お祭りに行かず」
「だから、行かずの『ず』って否定の『ず』でしょ？　なんで『行こう』ってことになるの？」
幸子は、大げさに首を振り振り言った。
「行かずの『かず』は肯定の『かず』だよ」
「肯定の『かず』って何よ」
紀子は笑った。
「さあさあ、そんなところにぼっ立ってないでお祭りに行かず」
「ぼっ立つの『ぼっ』って何よ」
「強調の『ぼっ』じゃん。国語で習ったでしょ？」
「えー、そうだった？」

× × ×

「さっちゃんは、『浜言葉』に自信と誇りを持って大切にしていたね。どんな風に疑問を投げかけても答えを

持っていたよ」
「あのね、おばあちゃん、これっていったい何？　はなだまさんって何？　どうして声が聞こえるの？」
わたしは、今日こそ聞き出そうと必死だった。
「そうか…ユキノは覚えていないんだね。まだ小さかったからねえ」
「え？　わたしが知っていることなの？」
おばあちゃんは、静かに言った。
「うん、『花渡し』だよ」
「花渡し？」
「この花たちは、さっちゃんから『想い』を渡されて『花霊』を宿したんだ。それを『花渡し』って言うんだよ」
おばあちゃんは、仏壇のろうそくを灯し、お線香を立てながら言った。
「おじいちゃんも、急な病気で亡くなってね…お葬式の後に、さっちゃんが花束を両腕いっぱい抱えて、この家に来たんだよ」

×　×　×

「はい、のりちゃん、『花渡し』されているかもよ」
幸子は、紀子に花束を差し出した。
「花渡し？」
「お葬式で飾られた花には花霊が宿ることがある。亡くなった人が花に言葉を渡して、大切な人に想いを伝えることができるっていう村の言い伝えだよ」
にわかには信じられないことだった。けれども、幸子はかまわず言葉の受け取り方を伝えた。
「『花霊さん、お願いいたします』と言って、枯れた花を抜くの。言葉を受け取ることを、『花霊をほどく』っ

て言うんだよ」
「花霊をほどく…そんなことが…」
「あたしも…あの夫が亡くなったとき、花霊をほどいたんだよ」
紀子は、こんなときに幸子が嘘をつくはずがないと思い直した。
「でも、こんなにたくさん…」
「全部に花霊が宿るとは限らないから、ありったけもらって来たよ」
紀子は、花束を受け取った。
「花を抜くときは、花の寿命をちゃんと見極めて、心から『お花さん、ありがとう』って思うことだよ。まだきれいなのに、言葉が欲しくて無理に抜いちゃあ駄目だよ。残りの花霊が消えちゃうどころか、大切な思い出が全部消えちゃうんだよ。それから、花がなくなるのが寂しくて抜かないでいると、自分を見失ってしまうよ。涙の沼に沈んじゃうよ。辛くても、ちゃんと自分で終わらせなくちゃいけないよ」
紀子は涙を流しながらうなずいた。幸子も泣いていた。

× × ×

「本当だったんだよ。あたしが、さっちゃんの言うとおりにしたら花霊がほどけて、おじいちゃんから渡された言葉が聞こえた。…おじいちゃんの言葉をたくさんもらったよ。それは、あたしたち夫婦にとって大切な思い出そのもの。ふたりで歩んできた道のりをたどることだった」
いつのまにか、雨は上がっていた。
「明るくなったね。外に出てみようか」
おばあちゃんに誘われるままに、わたしたちは近くの公園まで歩いた。この公園もさっちゃんとの思い出の場所だ。黒い雲の切れ目から少し青空が見えていた。
花を抜いたときに、まるで打ち上げ花火のように花から花霊が飛んで、はじけて言葉になる。

（ああ、そうだ…）

思い出した。これが初めてじゃない。五歳のあの日、わたしも見た。花霊の言葉を聞いた。そして、おじいちゃんとおばあちゃんの楽しかった思い出を、今日みたいに聞かせてもらったのだ。

おばあちゃんは歩きながら、

「雨の止み間に歩いとかないと、体がなまっちゃうからね」

と言って、「うーん」と伸びをした。

わたしは、毎日、おばあちゃんに「花渡し」でさっちゃんとの思い出を聞かせてもらった。「花霊さん、どうかお願いいたします」

すると、「ばか眠い！」と甲高い声。

「そうそう、あの日は寒かったねえ」

×　×　×

「さっちゃん、こっちこっち」

紀子は手を振った。幸子は、待ち合わせ場所の公園に五分遅れでやってきた。走ってきたので、ゼエゼエと息を切らしていた。

中学三年生で迎えた元旦。ふたりは、海岸で初日の出を拝もうと約束していたのだ。

公園から海岸までは、歩いてほんの数分。まだ暗い田舎道には、海岸へ歩いて向かう人たちと自転車で向かう人たちの流れができていた。

「さっちゃん、紅白を最後まで観たの？　すごいねえ」

「カウントダウンも…ばか眠い…」

「だろうね」

堤防には、日の出を待つ大勢の人たちが並んで伊豆半島の方を見ていた。
砂浜では、子ども会とスポーツ少年団が火を焚いて甘酒で体を温めていた。
「さっちゃん、ほら、もうすぐ半島のあのあたりから出るよ。ほら、ちゃんと目え開けて」
そのとき、初日が輝きだした。
「きれえな日の出だねえ…でも、ばか寒い！」
幸子は大げさに身震いした。
「ほら、お祈りするよ」
ふたりは、ぱんぱんと柏手を打った。
「どうか、無事に高校に合格できますように！」
あちらこちらで「万歳」の声が上がった。地元の人たちも、遠くから来た人たちも、一緒に新しい年を祝った。
紀子も、両手を上げて大声を出した。
「ばんざーい！　ばんざーい！」
「あはははは…のりちゃん、大胆だねえ。よし、あたしも」
幸子も、大きく息を吸って海に向かって叫んだ。
「ばんざーい！　ばんざーい！　ばか眠いよー！　ばか寒いよー！」

× × ×

「御利益がなくなるよって、止めたんだけどね。でも、ふたりとも同じ高校に合格できたんだよ」
しばらく暑い日が続き、花は次々としぼんでいった。
あんなにたくさんあったのに、今は白菊が八本残っているだけだった。それも、葉はしおれてしまっていた。

ところが、
「おばあちゃん、どう？　抜かなきゃいけないお花がある？」
と、わたしがたずねても、おばあちゃんはこう答えた。
「いや、…まだ、いいっしょ」
日に日に、おばあちゃんは元気をなくしていった。
そんな日が十日も続いた。
おかあさんは「寂しいのね。おばあちゃんの気のすむようにしてあげてね」と言った。
（でも…でも…）
わたしは気が気ではなかった。

さっちゃんが亡くなって、もうひと月が経とうとしていた。
わたしは、急いで学校から戻ると、必ずお花の水を替えて聞いてみた。
「おばあちゃん、どう？　抜かなきゃいけないお花がある？」
おばあちゃんは八本の白菊を見て、
「…冬でもないのに、こんなに持つものかね」
と、力なくつぶやいた。
私は思い切って言ってみた。
「おばあちゃん…その菊、ずいぶん枯れているよ」
おばあちゃんは、はっとした。
「葉っぱも茶色いし、毎日茎を切っているから、ずいぶん短くなっちゃっているし…」
おばあちゃんは、わたしが一言言うたびにびくんとした。

菊は茎がすっかり短くなって、花びんの縁に花弁の部分だけがきゅうくつそうに並んでいた。
「花びらも落ちちゃっているよ」
わたしは、耐えきれずに大きな声を出した。
「しっかりして！　自分で終わらせないと、自分を見失ってしまうんでしょ！　涙の沼に…」
わたしは、唇が震えて言葉が続かなかった。
おばあちゃんは、頭を振った。
「…そうか…ほんとうだ。ああ、ああ、あたしったらどうしたんだろう！」
おばあちゃんは花に両手を合わせた。
「花霊さん、あたしが間違っていました。どうか、お願いいたします」
おばあちゃんは意を決して、ぽいぽいと花を抜いていった。そのたびに花霊の言葉がはじけた。
[今日は、ばか忙しいっきよ！]
[もう、やっきりしちゃう！]
[やくたいもない！]
[そんなとこに、ぼっ立ってるじゃない！]
[えらい人だっきねー！]
[そこいらに、うっちゃっといてー！]
[ぬくといねー！]
でも、最後の一本がなかなか抜けない。花も抜かれまいと踏ん張っているように見えた。
おばあちゃんは目を見開いて「ふんっ」とおなかに力を入れた。
ぽいっ！
花から打ち上げ花火のように光の筋が走り、パンとはじけるのが、わたしにも見えた。

そして、最後にほどかれた言葉は…

「…こんだ、いくんち？」

おばあちゃんの目からぽろぽろと大粒の涙がこぼれた。

「…こんだ…すぐだあよ。すぐ会えるよ。あたしは、さっちゃんと同い年じゃあないかね」

すると、いつものさっちゃんの声が、わたしにもはっきりと聞こえた。

『うん。…はあ、行くわ…』

ふたりの間を、すうっと何かが通ったようだった。

さっちゃんだった。確かにさっちゃんを感じた。

それは…本当のお別れを意味していた。

「え？」

おばあちゃんは、さっちゃんが行ってしまった方向に顔を向けた。何かに必死に耳を傾けているようだった。

そうか、さっちゃんは最後に次の約束が欲しかったのだ。急なお別れになってしまって、おばあちゃんと約束できなかったから。でも…

「おばあちゃん、死んじゃいやだ」

わたしは、おばあちゃんにしがみついた。わたしも、ぽろぽろと涙がこぼれ、ふたりで声を上げて泣いた。

おばあちゃんは、わたしの背中を優しくなでながら言った。

「さっちゃんだって、わかっているよ。いつになるかわからない約束だけれど…『ゆっくり待ってるよ』って言ってくれたよ」

「…さっちゃんが？」

「うん、うん」

それから、ふたりで花びんのまわりに散らばった菊を拾い集めた。

「花霊さん、本当にありがとうございました」
おばあちゃんとわたしは、深々と頭を下げた。
花霊のひとつひとつに、おばあちゃんとさっちゃんとの幸せな瞬間があった。
「おばあちゃん、…お花なくなっちゃったね」
「お花がなくたって、毎日さっちゃんのことを思い出すよ。さっちゃんとの大切な思い出は、これっぱかの花じゃ足りないくらいだよ」
「おばあちゃん、もっと、さっちゃんとの思い出を聞かせてね」
「いっぱいあるよー。さっちゃんはひょうきんだったからねえ。楽しい話がいっぱいだ」
そして、おばあちゃんは自分に言い聞かせるように言った。
「これからは泣かずにさっちゃんのことを思い出すんだよ」
わたしも、今は悲しいけれど、さっちゃんのことを思い出すときは心から笑っていたい。
「だんだん、だんだん…そんな風になれるよ」
と、おばあちゃんは言った。
「そうなの？」
「ああ。そういうもんだよ。それは忘れるっていうこととは違うんだ。…ユキノには、まだ難しいかもしれないけど」
おばあちゃんは、大切な人と何度もお別れをしているからわかるのだ。
さっちゃんは、おばあちゃんと出会って幸せだと感じた一瞬一瞬を伝えてくれた。それは、さっちゃんからおばあちゃんへの「ありがとう」だったのだろう。
おばあちゃんは、菊を新聞紙で包みながら何か思い出したようだった。
「もうそろそろ、梅雨明けだねえ。…そうそう、夏休み前にふたりでね…」

さっちゃんが持っていたたくさんの幸せを、わたしも分けてもらった。おばあちゃんにさっちゃんのような親友がいたことは、とても誇らしく感じた。

さっちゃん、わたし、おばあちゃんを寂しがらせたりしないからね。